

山口県・下関市 古代遺跡と地名

～観光、郷土愛を育むために～

日本不動産研究所 山口支所
不動産鑑定士 高田 有章

本州・山口県の最西端に位置する下関市は壇ノ浦の戦いで有名である。この合戦で、源氏は神功皇后が龍神から授けられた、潮満珠（しおみつたま）・潮干珠（しおひるたま）の伝説を持つ長府沖の島、満珠・干珠を拠点とし、平家は彦島を本陣とした。

遠い昔、彦火々出見命（ひこほほでみのみこと＝山幸彦）という神が降臨して、兄さんから借りた大切な釣り針で魚釣りをしていたところ、その釣り針を魚に取られてしまった。それを探すために海士（あま）になって海に潜り龍宮へ行かれた。この彦火々出見命が降臨して海士になられたところが彦島の海士郷（あまのごう）で、彦火々出見命ゆかりの島で彦島となる。（参考：彦島八幡宮ホームページほか）

この彦島にある彦島八幡宮の境内は、日本書紀にもある縄文時代後期の彦島宮の原遺跡であり、この一角に何の変哲もない岩がある。その傍にはおよそ次のことが書かれている。

【彦島八幡宮ペトログラフィ岩】

ペトログラフィとは、ペトロ（岩石）、グラフィ（文字／文様）であり、岩に彫り込まれたシュメール文字（岩刻古代文字）のことだ。シュメール文字とは、世界最古のメソポタミア文明を起したシュメール人が世界で最初に発明した文字である。造船所のドッグと船島（巖流島）の海底を度々移動する人智を越えた岩は、地元の人からは通称「泳ぐ岩」として崇められていた。自然崇拜にもとづく信仰の神宿る岩霊石として当宮に安置されている。

彦島杉田丘陵にはもっと鮮明なペトログラフィ（岩刻古代文字）がある。日本ペトログラフィ学発祥の地である。



「彦島八幡宮のペトログラフィ」

この原稿の執筆話があった頃、弥生時代の下関市土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム訪問の際に竜（龍）巻に遭遇したため、龍から筆を起こした。最終氷期後の関門海峡は地続きで洞穴だったため、穴門（戸）と呼ばれ（本居宣長「古事記伝」）、アナト→アナガト→ナガト（長門）となり、山口県西部の旧国名が長州となる。また、彦島はその様から、引島とも言われた。



「平成 25(13)年 5 月、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムで遭遇した竜巻」



『『下関市あるかぼーと』から望む関門海峡』



「満珠荘から望む関門海峡」